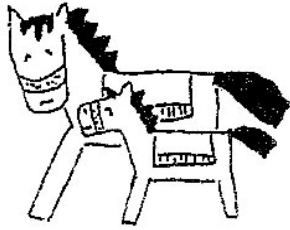


お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぼっくりぼっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



令和4年 7月 No. 332

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松第二保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<https://oumanooyako.com>



(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		7月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
7月 4日	月	体験保育	10:00～12:00	室内で運動遊びの遊具で 体を動かしてみましょ
7月 8日	金	ヨガを楽しむ会	14:30～16:00	初めての方も増え、 ヨガを楽しんでいます
7月 9日	土	絵本と小物作り	14:00～16:00	「ふしぎなおうち」の画用紙シアターを作ります。 お子様とのふれあいづくりに役立ちます。
7月 16日	土	金子みすゞさんの会	13:30～15:00	浅井寿子氏（倫理研究所講師）に 「孫育てについて」話していただきます。
7月 21日	金	こうさぎおはなし会	15:00～16:00	1～2歳のお子様も楽しめる絵本やわらべうたなど、 盛りだくさんです。どうぞ、どなたでもおいでください。

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して
いますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

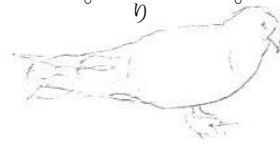


金子みすゞ
「美しい町・上」より

ク知しな
ッらしい
クぬろに
とかいを
鳴お鳩買
いたはお
ぞ

ついき
やちやは
やつのむ
や濡赤は
れもみさ
てどきり

八百屋の鳩



☆今月の内容 — やっぱり子どもたちが大好きなのです！

松村 二美 著 「学級愉快Ⅱ」より



やっぱり子どもたちが大好きなのです！

--- 負けてもいいから… ---

松村 二美 著

私は『勝つ』ことが大好きな人間である。オリンピックは、勝つことよりも参加することに意義があると言われていたが、あれは嘘である。もしそれが本当ならば、一位の選手も三十八位の選手も同等な扱いをされるべきだ。しかし、現実はどうだろう。優勝すれば新聞の一面のトップに「〇〇堂々の金メダル」と、特大の写真付きで報道される。テレビにも雑誌にも何度も喜びの声が報じられ、帰国後も英雄扱いである。一方、三十八位だった選手は三面記事の片隅に、「〇〇、惜しくも三十八位で終わる」と見逃されるくらいのスペースに三、四行で報じられる程度だ。

参加することに意義などあろうはずがないというのが持論で、常日頃から教え子たちには、参加するからには勝てと教えてきた。だから、教え子たちは必死にがんばって担任の期待に応えようとした。現に、隣の学級との野球大会でも、バスケットの試合でも、連合陸上大会でも、ことごとく勝ってきた。それを私はとっても喜んでいた。

ある年、一年生から六年生までがすべて四組までであった。各学級を赤、白、青、緑と四色に分ける運動会が開かれた。四色対抗のリレーもあった。何と、四色とも、アンカーは全部自分の学級の子供であった。応援のしようがなく、

「みんな、みんなガンバレー」

「とにかく、ガンバレー」

と、声援するしかなかったという笑い話さえある。

もちろんがんばってもトップ争いに加われない子どもには、他の分野での活躍を支援した。“参加するからには勝て” という私の思いを、いつも子どもたちは忘れたことがなかった。

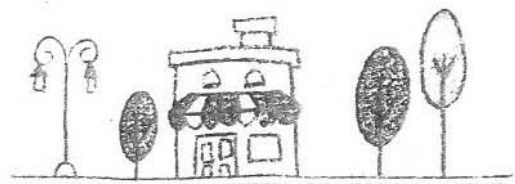
松村 二美 (まつむら ふみ)

1947年5奈良県桜井市に生まれ、小学校教員となる。

結婚後、東京都へ。4人の子供を育てながら、小学校の教員を続ける。また、東京都教育委員会の任命を受け、特別活動の研究員・開発委員として研究を続ける。

その後、目黒区立月原小学校の副校長となり、2008年、江東区立豊洲北小学校副校長で定年退職。

2013年「学級愉快」を出版。



ある年、マラソン大会があった。学年の全児童が一斉に走る。前日に予備の大会があり、早かった者から大会当日には、前列からスタートすることができる。

運動神経抜群の一郎君には、特に期待をかけていた。

「頼むよ一郎君」

彼は野球でもバスケットボールでも、何でも私の期待に応えてくれていた。しかしマラソンは、一組の健君が優勝候補と目されていた。四年生までは、ずっと健君が一位を取っていたらしい。

楽しみな予備大会の日がやってきた。校庭を二周して外に出て行くのである。一郎君は出て行く時は、前から十番目あたりを走っていた。どのくらいたっただけだろうか？裏門付近が騒がしくなってきた。いよいよトップの子どもが入ってくるようだ。私は裏門を注視した。子どもの姿が大きくなってきた。トップは彼である。しかし、すぐ後を二位の健君がぴったりとくっついていっている。肩を並べた。大ピンチである。

「一郎君がんばれー、負けるな〜」



大声援を送った。

彼は必死の形相で、最後の力を振りしぼった。少しずつ少しずつ二位との差が開いてきた。

「やった〜 一位だ」

喜んだのもつかの間…… とんでもないことが待っていた。何ということだろう。ゴールをした彼は、よろよろと倒れ込んでしまったのである。保健室に担ぎ込まれていった。私は、すぐさまその後を追った。顔面蒼白になっているのが自分でも分かる。自分も倒れそうなくらいだった。

彼にもしものことがあったら……、不吉なことが頭をよぎった。私のせいだ。もしものことがあったら、私は即、教師を辞めよう。いや、辞めただけで許される問題ではない……。どうやって償おうか……。いや、それより何より、一郎君にもしものことがあったら、自分は生きていていいのだろうか？……

次々と色んなことが頭をよぎり、混乱していた。へなへなと床に倒れ込んだ私を見て、ベッドの上から彼は言った。

「先生、僕は大丈夫ですよ。昨日風邪をひいて熱が出たんです。それなのに、今日、無理をして走ってしまって…… ごめんなさい。心配かけて……」

私は涙があふれそうになった。

先生が勝てと言ったので、無理して走って倒れた。何と言われても仕方がないところを、彼は私をかばってくれた。私は余計申し訳ないと思った。

「風邪をひいていたのに、無理して走らせてしまったね。悪かったね。明日は負けてもいいよ。一郎君の体の方が大切だから……あなたに、もしものことがあったら、それこそ先生はショックだから……負けてもいいよ。無理しないで……」

と言った。彼は無言で聞いていた。

マラソン大会当日、空はすっきり晴れていた。私は勝ち負けより、彼の体の調子を心配していた。

「無理しないでよ。負けてもいいから……」

スタートラインに立った一郎君に、また声をかけた。ピストルの音とともに一斉にスタートが切られた。途中でも、彼が倒れないかなあ〜と、ずっと心配していた。ゴールしたタイム順に整列させる係の準備をしている時も、彼の体調ばかり気にしていた。やがて、裏門の方から、参観していた保護者の歓声が上がった。

トップの子どもが入ってきた。な、何と、トップを走っているのは、紛れもなく彼であった。しかも二位がまだ見えない。ダントツの一位である。今日は足取りもしっかりしている。余裕の表情でゴールテープを切った。

「すごいね。やったね一郎君。おめでとう」

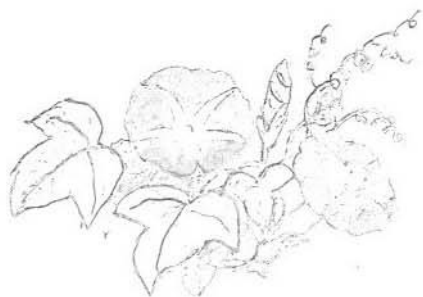
大きな拍手を送り、抱きしめた。

教室に戻ってからも、みんなで健闘をたたえた。大きな拍手をし、給食の時間には牛乳で乾杯もした。みんなで彼をう〜んと賞賛した。彼はみんなの前で言った。

「あの、負けるのが大嫌いな先生が、いつも参加するからには勝て！と教えていた先生が、負けてもいい、なーんて、三回も言うんだもの。僕は思った。余計負けられない。明日は何があっても、絶対、絶対、負けられない。先生のためにも絶対、勝とうと思ったよ。昨日、薬を飲んでぐっすり寝て、今日に備えた……」

それからの私は、ちょっと変わった。“参加するからには勝て！”という教えは、変わらなかったが、その後に、ちょっぴり言葉が加わった。

「しかし、命をなげうってまでは勝たなくても良い。命は最優先されるものである」



著書「学級愉快Ⅱ」より